

NHK「女子マラソンメダリストの証言」

—あなたは誰のために走ったのですか— (245号 1996.11)

今回のアトランタオリンピックでは、世界百数十か国、数十億人の人々に発信されるテレビのオリンピック放送のうち、多くの時間が「陸上競技」に費やされた。

中でも、マラソンは陸上競技のフィナーレを飾るものであり、メインイベントの一つでもある。

9月初旬、NHKが「女子マラソンメダリストの証言」というタイトルの番組放送した。その番組が初めに、「あなたは誰のために走ったのですか」という金銀銅の3人のランナーに質問を投げかけた。

エチオピアのロバ、金メダリストが「エチオピアの国民のために」、

旧ソ連のエゴロア、銀メダリストは「家族のため」、

日本の有森、銅メダリストは「自分のために」

と、それぞれの違いをはっきりとさせる答えを返していたのが大変印象的だった。

ロバ選手の国エチオピアでは、飢餓と部族間の争いで国民が苦しんでいる。そんな状況でもアベベ選手の活躍の後、走る事を国技として、長距離ランナーを育成し続けてきた政府にとって、オリンピックで金メダルを取ることは、部族の統一と国力をあげる一番の方法だった。五輪後、帰国したロバ選手を祝福しようと空港には百万人の人が集まったと言われる。

エゴロア選手は、旧ソ連時代優秀な成績をあげれば、生活が保障されると努力し、国の代表選手に成長した。ところが国が崩壊したため、夢は消え去り、家族、親、兄弟の生活を支えるために走るようになった。9歳の息子の世話をしたり、2人目の子供が欲しいなど、母親としての希望と、走ることをやめるわけにはいかない生活事情との間の苦悩があった。

有森選手はバルセロナ以後走ることができなくなった。アマチュアスポーツの矛盾、勝敗を追及する陸連と企業スポーツ選手の人権など、自分の中にある問題に押しつぶされそうになり、解決ができないけれど逃げたたくないために、もう一度挑戦したいと語った。レース後、その逃げなかった自分に名セリフ「自分で自分褒めたい」と言った。

今回のオリンピックで、日本選手からは出発前に「オリンピックを楽しんできたい。」ということをとくさん聞かれた。以前のように「メダルのために」「国のために」という言葉がなくなってきたのは良いことかもしれない。しかし選手のコメントの内容が、技術的な反省が多く、社会的な発言に乏しいことは残念である。言いにくいかもしれないが、もっと日本のスポーツ環境の整備や、スポーツの地位の向上に向けた発言が望まれる。

また、オリンピックの根本原則である、「友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって相互に理解する」というオリンピック精神の実現に向けて、選手の間を広げていくことが大切であると思われる。

それにしても、この百年を節に、I O Cも、行き過ぎた商業主義、ドーピング克服などの問題を、友好と平和という基本理念に基づき、見直すべき時期にきているのではないだろうか。